

史跡 大平山元遺跡

青森県北部の津軽半島にあるこの前史時代の遺跡では、石器に加えて、日本で最初期の土器がいくつか発掘されています。ここで発掘された製作物は、前史時代の北日本の人々の暮らしが、旧石器時代末期の間にどう変化し、縄文時代の始め（紀元前 13,000 年）にどう定住型の暮らしに変わったのかを示しています。

石器が私たちに教えてくれること

大平山元遺跡で出土した石器には、斧、ナイフのような刃物、動物の皮をはぎ木を細工するための道具、および先の尖った石器（狩猟に使われたのでしょうか）などがあります。これらの石器は、より大型で初歩的な道具から、技術的により洗練された刃物や矢じりまで、形も大きさもさまざまで、シカなどの動きが速い動物を狩る目的で作られています。

石器のほとんどは粘板岩から作られています。粘板岩は、近くの川で入手することができたと思われます。道具を分析したところ、先史時代の北海道や中部日本（関東）と関係がある地方技術など、多様な石造技術が用いられていたことが示唆されています。石器と技法の多様性が示唆するのは、他の地域や集団と重要な交流があったということです。

土器、および新しい暮らし方への移行

大平山元遺跡で見つかる土器片は、世界で最も古い時期のものです。（1つの土器のものだと信じられている）少量の土器片について、炭化残留物があることが分かりました。これらの土器片について炭素年代測定を行うと、これらの土器片が紀元前 13,000 年からのものであることが示唆されます。これは、欧州や中東で土器が使われる数千年前のことです。

縄文時代の「縄文」という名前は、「縄で文様をつける」ことから来ています。縄による文様は、縄文時代の典型的な土器の特徴なのです。しかし、大平山元遺跡で見つかった土器片には、文様がありません。元々の土器は、調理など、純粋に実用的な機能を果たしていたと思われます。土器を運搬するのは簡単ではありません。土器が出現したということは、より定住型の暮らしに移行したことを示しています。大平山元遺跡から出土した土器片は、縄文時代のごく初期からのものです。この時期に、前史時代の日本の人々は、より定住型の生活を営むようになり始めました。

出土品が見られる場所

土器片と石器は、外ヶ浜町大山ふるさと資料館に展示されています。この資料館は、大平山元遺跡から道路をはさんで向かい側にあり、以前は小学校だった建物です。入館は無料です。基本情報の一部は英語で提供されています。

次の見どころ

津軽半島には、亀ヶ岡石器時代遺跡 [\[リンク\]](#) や田小屋野貝塚 [\[リンク\]](#) など、多くの縄文遺跡があります。亀ヶ岡石器時代遺跡では、最も洗練された縄文土器がいくつか発見されています。縄文時代（紀元前 13,000 年～紀元前 400 年）について、またこれらの遺跡や北日本の他の遺跡で見られる前史時代の集落の発展について、さらに発見しましょう。